

ナシ「あきづき」の安定生産に適した整枝方法

ナシ「あきづき」は、従来の3本主枝整枝法に比べ、4本主枝の改良H字形整枝法でも果実品質に差がないうえ、樹冠占有面積1㎡当たり収量には差がなく、棚面利用率が高いため10a当たり収量が多い。なお、改良H字形整枝法は1樹当たり樹冠占有面積が大きいので、植栽距離を広くとる必要がある。

農業研究センター果樹研究所落葉果樹研究室 (担当者: 加久るみ子)

研究のねらい

「あきづき」は肉質が良く、食味良好で「豊水」や「新高」に発生するような「みつ症」もなく優れた品種として産地への導入が図られている。「あきづき」は「幸水」に比べて樹勢が強く、新梢が多く発生する。結実した果台は、「幸水」同様に翌年の花芽がつきにくく、短果枝維持が困難で、えき花芽の着生も良くない。収量確保のためには、長果枝、短果枝ともに利用する必要があるが、新梢が長大化しやすく、側枝として利用できる枝が制限される傾向がある。そこで、本県における「あきづき」に適した整枝法を選定する。

研究の成果

1. 3本主枝整枝法と改良H字形整枝法には、果実品質に差が認められない(表1)。
2. 樹冠占有面積1㎡当たりの収量にも、整枝法の違いによる差は認められない。3本主枝整枝法の樹冠は円形になるため棚面利用率が80%程度であるが、改良H字形の樹冠は四角形のため棚面利用率が高く、成園の10a当たり収量は、3本主枝より改良H字形が多い(図1、図2、図3)。
3. 樹冠占有面積は3本整枝より改良H字形が大きい(図4)。
4. 10年生時の平均主枝長(主幹から主枝先端までの距離)は、3本主枝の4.0mに対し、改良H字形は3.5mであるため、畝間は7m程度が適正である(データ略)。
5. 「あきづき」の側枝の長さは、2～3年生側枝で約150cmであり、改良H字形の主枝間隔は、3m程度必要である(データ略)。

普及上の留意点

1. 改良H字形樹は、4本の主枝を主幹から十文字に分岐させ、H字形の樹形を作るときに主枝の方向を急激に曲げないように留意する。
2. 主枝先端部を冬季に棚面まで完全に棚付けすると裂けやすいので、主枝育成中は主枝に添え竹をして、樹液流動中に少しずつ棚の方へ引っ張り張り棚付けをする。
3. 改良H字形は畝間が7m程度、株間は6m程度必要であり、3本主枝とは植栽距離を変える必要がある。

表1 整枝法の違いが果実品質に及ぼす影響

	1果重 (g)	果形指数 ^z	果肉硬度 (lbs)	糖度 (Brix)
3本主枝	581	4.0	4.8	13.8
改良H字形	600	4.0	5.2	13.4

^z) 良い(5)～悪い(1)の5段階で評価
 数値は2008年～2010年の平均値

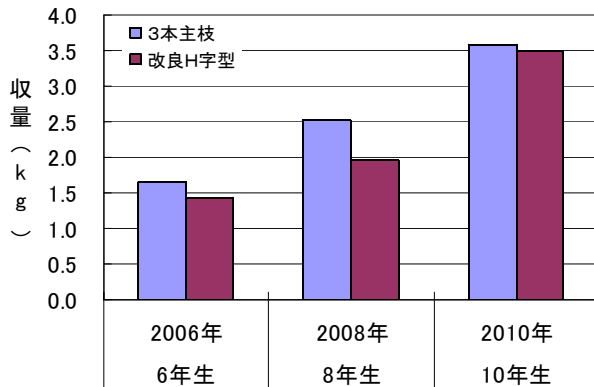


図1 整枝法と樹冠占有面積 1 m²当たり収量の関係

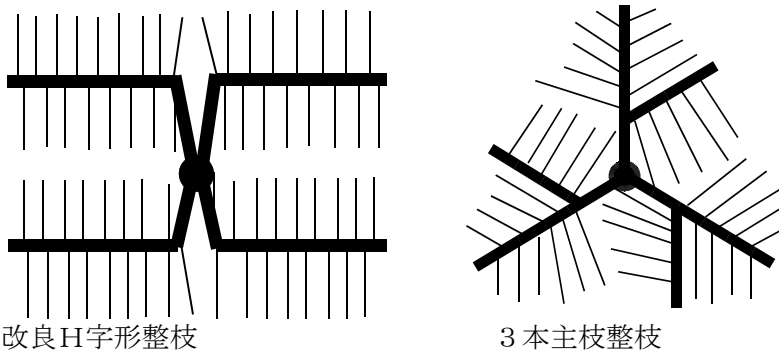


図2 各整枝法の模式図

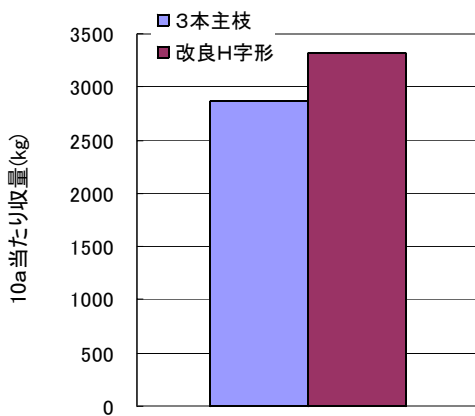


図3 整枝法と10 a 当たり収量の関係

棚面利用率を3本主枝は80%、改良H字形は95%とし、10年生樹の1 m²当たり収量から試算

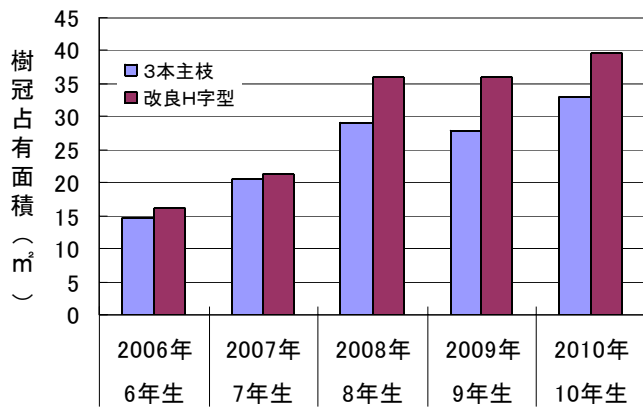


図4 整枝法と樹冠占有面積の関係